

質的研究のエッセンスを学ぶ

—西條剛央著『ライブ講義・質的研究とはなにか SCQRM ベーシック編』—

村中 雅子

要 旨

西條剛央著『SCQRM ベーシック編 ライブ講義 質的研究とは何か』を紹介する。本書は質的研究法の初学者が「質的研究とは何か?」という基礎的な問いから学べる入門書である。難解な理論の説明から入るのではなく、著者と学生がやりとりするゼミ講義を再現する形式をとっているため、リサーチクエスションのたてかたから、データ収集、分析、モデル構築、研究成果の発表まで研究を進めていくプロセスが詳細に再現されている。また本書は新しい研究方法である構造構成的質的研究法(Structure-Construction Qualitative Research Method, 以下 SCQRM と略記)の専門書でもある。本稿では SCQRM の中核概念である「関心相関性」の解説を中心に論を進め、本書中で実際に進められている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを分析技法として採用した研究のプロセスも紹介する。

【キーワード】質的研究法、 構造構成主義、 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

1. はじめに

近年、多岐にわたる分野で質的研究が注目されてきている。本誌『言語文化と日本語教育』の読者の主な関心と思われる日本語教育学の周辺領域、例えば教育学、心理学、社会学においても、私たちが生きる多様な世界で起こる多様な現象を解明するために、質的研究への期待が高まっている。実際に過去 2 年間に本誌に研究論文として掲載された 11 本の研究論文のうち 5 本が、結果を数量化しない質的研究である。

本稿では近年注目が集まっている質的研究の入門書のひとつである西條剛央著『ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編』を紹介したい。

2. 書誌情報

西條剛央(2007)『ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編』新曜社 2,310 円(税込)
ISBN978-4-7885-1071-5

3. 本書の概要

本書は構造構成主義¹を体系化し、その応用・普及を行っている西條剛央氏が、質的研究法の初学者に向けて執筆した入門書である。また本書は入門書でありながら、新しいメタ研究法²である構造構成

的質的研究法(Structure-Construction Qualitative

Research Method, 以下 SCQRM と略記)の専門書でもある。

『SCQRM ベーシック編』と題された本書では研究の着想からデータ収集、分析、モデル構築までの過程を、著者と学生がやりとりするゼミ講義の再現から、具体例を通して詳細に学ぶことができる。さらに構造構成主義および SCQRM の中核概念である「関心相関性」をおさえることによって、多種多様な質的研究法に通底する質的研究のエッセンス、原理的な原則を学ぶことができる。

4. 本書の構成

本書はゼミ講義の再現という形式をとっているため、各章は 1 回ごとの講義として構成されている。章立ては次のとおりである。

- | | |
|-------|----------------------|
| 第 1 回 | 自己紹介とイントロダクション |
| 第 2 回 | 質的研究法とはどのような研究法か? |
| 第 3 回 | 仮説と理論 |
| 第 4 回 | 研究テーマとリサーチクエスションを考える |
| 第 5 回 | グループディスカッションの実施 |

- 第 6 回 テキストから概念を作る- 質的分析法の概観
- 第 7 回 対象者をどのように選ばばよいか?- 関心相関的サンプリング
- 第 8 回 質問項目を考える- 関心相関的質問項目設定法
- 第 9 回 研究倫理とインタビューの基本
- 第 10 回 パイロット・インタビューから学ぶインタビューの実際
- 第 11 回 インタビューの結果と分析ワークシートの作り方
- 第 12 回 分析ワークシートの検討
- 第 13 回 理論の作り方
- 第 14 回 理論の検討
- 第 15 回 理論のバージョンアップ
- 第 16 回 理論的飽和から目的相関的飽和へ

本稿ではまず構造構成主義と SCQRM に共通する中核概念「関心相関性」の解説を中心に論を進めていきたい。次に本書中で実際に進められている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下 M-GTA と略記)を分析技法として採用した研究のプロセスについて述べる。

5. 関心相関性

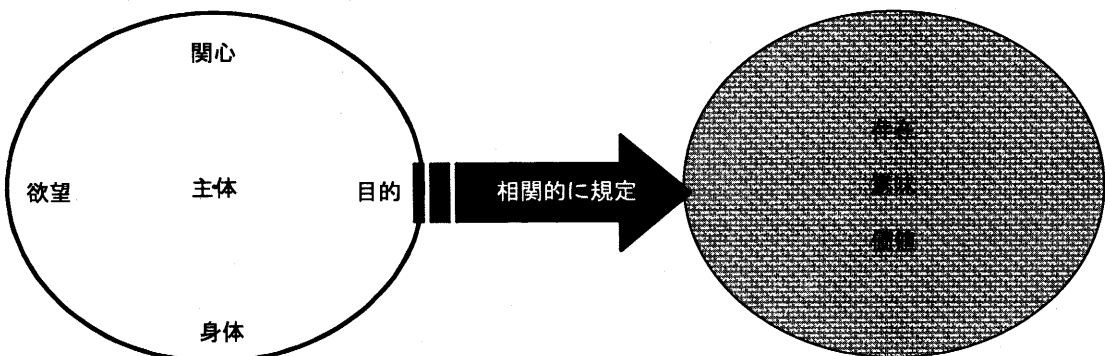
構造構成主義の中核概念であり、SCQRM においても鍵となる概念は「関心相関性」である。

SCQRM では「関心相関性」にもとづいて関心相関的観点から研究を構成する要素を把握する。「関心相関性」とは「存在や意味や価値といったものは、すべて身体や欲望、関心、目的といったものと相関的に規定される」(西條 2005)という原理である(図 1)。これはものごとがもつ意味や価値が私たちの身体や欲望や関心とは別に、そのもの自体に独立してあるものではないということを示している。

この「関心相関性」にもとづいて、関心相関的観点から研究を構成する要素を把握するという事は、認識論・理論・フィールド・対象者・技法・結果の価値は研究者の関心や目的によって規定されるということである(図 2)。つまり研究を構成する要素の価値は研究者の関心や目的とは別にそのもの自体に独立してあるものではないと考えられる。

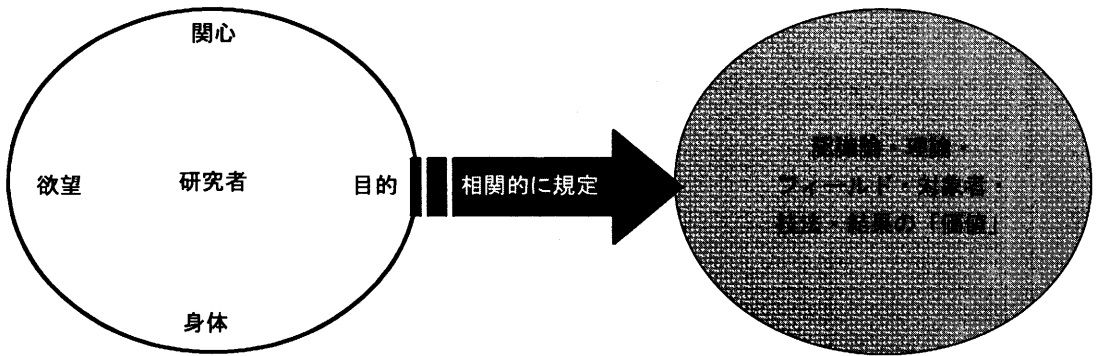
言い換えれば、SCQRM では研究者が関心や目的に照らして理論や対象者や分析技法を選択し、バックグラウンドになる認識論³でさえも関心や目的に照らして選択されるということになる。

SCQRM をメタ研究法と呼ぶ理由はまさにこの点にある。SCQRM は KJ 法やグラウンデッド・セオリー・アプローチなどといった個別の技法とは異なり、それらの技法をメタレベルから基礎づけている。つまり SCQRM は個別技法のメタレベルにあるため、個別技法は SCQRM により関心相関的に選択される⁴もので、SCQRM のもとで、ある目的を達成するために機能するツール・手段となる。



「存在・意味・価値」は、主体の「身体・欲望・目的・関心」と相関的に規定されるという原理

図 1 構造構成主義の中核概念となる「関心相関性」
西條(2007) P.5 図 1- 1 より発行元・著者の許諾を得て転載



研究を構成する要素の「価値」は、研究者の関心や研究目的と相関的に規定される

図2 関心相関的観点による研究構成要素の把握

西條(2007) P.6 図1-2より発行元・著者の許諾を得て転載

これは一見あたりまえのような原理であるが、研究を進めていくなかで五里霧中の状態になると、案外忘れてしまうこともある。例えば、ある研究課題を明らかにするという目的を達成するための手段として選んだはずの分析技法であっても、その技法に忠実であろうとするばかり、自分でも気がつかないうちにその分析技法を使いこなすことが本来の目的とすり替えられてしまうことがある。このようになると、その研究は技法に縛られ、研究目的に最も適した方法が検討されず、最終的に目的を達成できないまま終わるといった本末転倒な事態が起こりうる。

6. 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチへの応用

本書では SCQRM を M-GTA に応用して実際に研究を行っている。第4回(章)から第15回(章)までは SCQRM にもとづく M-GTA を用いた具体的な研究がわかりやすく再現されている。

まずリサーチクエスチョンを検討し(第4回)、それを明確化するために受講生のグループディスカッションが行われた(第5回)。ディスカッションは録音されている。次にそれを文字に起こしてトランスクリプトを作成し、それをテキストとして分析した(第6回)。このテキスト分析は内容からキーワードを探し、それに名付けを行う(小見出しをつける)という作業である。この作業はグラウンデッド・セオリー・アプローチなどにもつながるテキスト分析の基本として紹介されている。

これ以降は M-GTA を応用した具体的な研究が進んでいる。第7回では第6回で明確化したリサーチクエスチョンに照らして、対象者が選ばれた。ここで登場するのが「関心相関的サンプリング」という概念である。これは M-GTA における「理論的サンプリング」⁵に相当する。研究目的に照らして研究対象者を選択する際の鍵概念である。

次にデータ収集(インタビュー)の質問項目が検討された(第8回)。この質問項目の検討は「関心相関的質問項目設定法」として書かれている。第9回ではデータ収集に向けて研究倫理とインタビューの基本が解説された。次に、行われたインタビューを振り返り(第10回)、概念⁶を生成して分析ワークシート⁷を作成した(第11回)。その後、概念とカテゴリ⁸の整理を行って(第12回)、第13回から第15回にかけては理論(モデル)の作成、検討、バージョンアップと、理論(モデル)がボトムアップ的に作成されていく過程が示されている。

以上のように具体的な研究の実際が詳細に再現され、初学者である学生がその都度抱く疑問をひとつひとつ解決していく過程を通して、SCQRM を使った研究例の手順を、まるごと学ぶことができるようになっている。

そして最終回(章)である第16回では M-GTA で言われている「理論的飽和」⁹という概念の捉え方について、SCQRM の観点から検討しなおし、「目的相関的飽和」という新しい概念が提示されている。

7. 終わりに

本書は「関心相関性」という原理的概念をおさえることによって、すべての質的研究に通底するエッセンスを学ぶことが可能であり、かつ実際おこなわれた研究の再現から、具体的手続きの詳細を学ぶことも可能である。それゆえ、すでに質的研究を行ってきた研究者がこれまでの自分の研究を振り返る際にも、学生が初めて質的研究を学ぶ際にも、本書から有益な示唆を得ることができるだろう。

SCQRM ベーシック編と題される本書では理論(モデル)の作成までが収められているが、続編であるアドバンス編¹⁰では論文作成・発表・評価から質的研究が抱える最大の難問である一般化の問題や認識論・存在論・言語論までが検討されている。SCQRM によって質的研究に関する有意義な議論や示唆が今後も展開されることを期待したい。

注

1. 英訳は structural constructivism. SCQRM は構造構成主義から誕生した質的研究法である。
2. メタ研究法とは一般的な研究法のメタレベルにある研究法を指す。
3. 研究には背景となる認識論が必要である。客観的実在を前提とする客観主義と、それを前提としない社会的構築主義は相容れない認識論であるが、こうした認識論の絶対的的正しさを検証することは不可能である。

SCQRM では絶対的認識論を想定せず、関心相関の観点から研究目的に照らして妥当な認識論を採用することができる。

4. SCQRM は質的研究法のフィールドで体系化されているため、ベーシック編である本書では個別技法として質的研究法が SCQRM の中心的応用範囲として書かれている。2008 年春に刊行のアドバンス編では量的研究も応用範囲として想定した「構造構成的研究法 SCRM」という呼び方も紹介されている。
5. M-GTA で用いられるサンプリングに関する概念。研究者が研究テーマに照らして理論的に調査対象者を選ぶ。
6. M-GTA における分析の最小単位。
7. M-GTA の分析過程で作成されるシート。1 概念につき 1 枚作成され、概念とその定義、具体例、理論的メモからなる。
8. 概念が包括されたまとまり。
9. M-GTA における分析終了の判断点。「分析結果を構成する概念が網羅的になり、概念相互の関係、カテゴリーの関係が、データに裏打ちされた上で、理論的にまとめられたことを指す。」木下(2003)。
10. 2008 年春に刊行。

参考文献

- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
西條剛央 (2005) 『構造構成主義とは何か』北大路書房
西條剛央 (2008) 『ライブ講義・質的研究法とは何か SCQRM アドバンス編』新曜社

むらなか まさこ／お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学専攻 言語文化論領域
salutmasako@hotmail.co.jp